

子どもと(4)

七月・自然の中で

清水 光子

まだ春浅い頃、数週間の小旅行から戻った私を、庭の花々が、あっと驚く程^{けんらん}絢爛と迎えてくれたときのうれしさ！ あんずの桃色、梨の花のややあおみをおびた白、そして緋色に近い紅のぼけ、草花では黄水仙、白の口紅水仙や、紫やもも色のヒヤシンス、フリージアなど、一斉に笑っている。そのとき、ふと足許をみると、はこべの小さな白い花が私を見上げているではないか。それを見て、閃光のように「星の王子さま」を連想したのであった。それから夢中で、改めて、何度も何日も繰り返し読んだ。サン・テクジュペリの「夜間飛行」や「人間の土地」も。何か魅かれるように、憑かれたように読みふけた。そして今、七月、七夕祭り星祭りの七月である。青葉となった梨に小さな粒が葉がぐれにみえ、柿の実は青い卵のように葉にかくれてついている。

夏至を境に、北半球では太陽が南に傾きはじめたというのに、夏はこれから本番であ

る。

植物園の林の中を探険して走っていたとき、ふいに「おばあちゃん先生、もとは子どもだったんでしょう？」とA子がいった。「ええ、そうよ。」と言ったきり後のことばが続かなかつたのは、ただ走ったための息の弾みだけではなかつた。五人程の子どもの達の丸い額には汗が光っていた。林の中はひんやりして、青葉のいい香に満ちている。

倉橋惣三先生は「育ての心」の中の、「汗」という題の文章で次のように言われている。「子ども達の可愛い額に汗がみえる。拭いてやろうとしても駆けて行ってしまつて、またひとしきり汗をかいている。」と。そして「額に汗するという言葉は、大人の実生活に於て、勤労を礼讃する言葉である。子どもの遊戯生活が大人の実生活と同じ貴さを持つとすれば、子どもの汗も同じ貴さをもつものである。汗の出る程遊ばない子、遊べない子、汗の出ないように静かにばかり座らせられている子、汗を出すと叱られる子、どれも礼讃に値する子どもの生活といえない。どの子どもにも、存分に汗する程の生活をさせてやらなければならない。云々……」と、既に半世紀前に言っておられる。

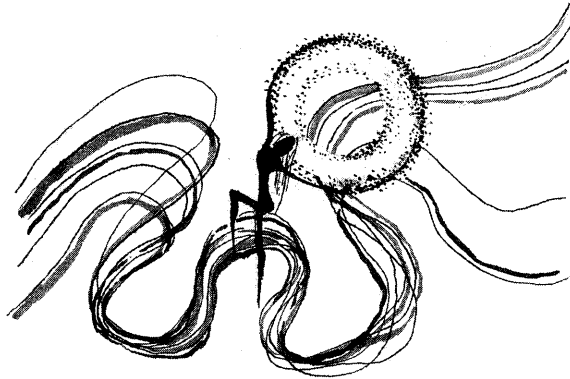
屋内は冷房で、暑いから外へ出て遊ばせない。水遊びは覆いのあるところで小じんまりと、そして節水だから砂場に水は使わないように、など、可愛いそうにそのように慣らされているので汗などかく経験がない子どもがいるのではないかしら、と思うこのごろの子どもの身辺である。

「ね、汗をかくつて、どういうこと？ 汗の絵を画いて！」この声はきき取れない位弱

い、でも必死な叫びに似た声、それがきこえてくるように思える。

「月なきみ空にきらめく光、ああ洋々たる銀河の流れ、仰ぎて眺むる万里の彼方、いざさおさせよや 究理の舟に」という少々むずかしい歌を教えられたのは小学校低学年頃だったと思うが、都会の空に星が見えなくなったのはここ十数年来のことのようだ。それにしても、いつか信州の山を子ども達と歩いて、夜、宿の近くの草原に仰向けにころがって見た星空のことは何年経っても忘れられない。「ああ、洋々たる銀河の流れ」——まさにその通り！ 降るような星、手の届きそうな、との形容詞がびんとわかるようで、しばらくは子どもも私もそれぞれの感慨にふけて、黙ってすごしたものだ。「羊の絵をかいて！」という星の王子さまの澄んだ声がきこえたかも知れない。「ああ無数の星の中のどれかに咲いているたった一輪の花がすぎだったら、その沢山の星を眺めるだけで、その人は幸せになれるんだ」と星の王子さまは言う。星に生えるいい草と、オオバブのような人のんな草、けんのんな草ははやく根からひっこぬいてしまおう、ぐずぐずしないで小さいうちに、いっしょうけんめいに根から絶やさねば！ これは大へんなことなのだ、王子さまを泣かすまい、王子さまの気持ちを何とかわかってあげたいものだ。

笹竹に、色紙やかざりや、願い事を冊ざくにかいて結ぶ七夕祭りの日本的な風習を、宇宙に羽ばたく現代科学の発達の時代にふさわしくないなどと、どこの誰が言うのかしら？ 逆に、想像力やロマンを求めるといって殊更らしく七夕祭りを盛大にする傾向もありはないだろうか。



四月からの集団生活が七月に入ると一くざり、夏休みになる。子どもも、先生も、親達も或る緊張感から解き放たれる。でもそれは少時の間で、子どもたちは友だちとの生活をなつかしむ。けれど、夏休みは日なたと日蔭のようなものなのかも知れない。倉橋惣三先生の「日かげ」の題のもとに次の文章がある。「子どもには一ぱいの日なたと共に、静かな日かげも与えてやりたい。夏の日が強くなると、木の葉が繁って涼しいかげをつくってくれる。自然は何というこまやかな心づかいと、やさしいいたわりに行き届いていることであろう。励ましと共にいたわりを忘れない。引き立てると共に憩わせることを忘れない。」

夏休みはこのような意味が大いにあるような気がする。海や山やいなかなどに出かけ

て、新しい経験をすることも大へんいい事だと思う。それも集団でなく家族で、または、数家族で、行った先々で新しい人間関係をつくっていき、それが子どもらしくごく淡いつきあい方であっても、王子さまが行く先々の星の住人や、きつね、へびたちから、さまざまな物の考え方や生き方を学んだように、そして大切なことは見える事でなく、心であることを感じ取って欲しい。そんな夏休みが始まる七月を思う。

志賀直哉という作家は「きれい」とか「美しい」という通り一遍のことはをきらっていたが、はじめて望遠鏡で夜空の星を見て「これは美しい！ きれいだ！」を連発したという。プラネタリウムで星座の名を教えられたり、星についての知識を学ぶことも意義あることではあるけれど、何よりもまず満天の星を仰ぐという経験を、ぜひ子ども時代にさせたいと思う。「究理の船」にさおさすのは、その経験が土台になるのではないかと思う。

星にばかりこだわってしまったけれど、星に限らず、身近な自然に目を向ける夏休みにしたいと思うのである。

それとまた、普段の日曜、祭日の休みとはちがひ、夏休みを、家庭の営みを生活として経験させる機会にしたい。お手伝いをするのがその一つである。実に素朴な、サバイバル的生活を人里離れたところでさせることが出来たら何とすばらしい事だろう。もとより大人の事前の準備など、ぬかりなく配慮されねばならないけれど、或る外国の作家が「今、子ども達は子どもらしい、けがれない心を失っているのではないか」と言ったそう

であるが、けがれない心を失わせるようなバオバブの木は、小さいうちに抜き取ってしまう、そんな土づくりを、大人が本気で、急いでやらねばならない時だと思う。サン・テクジュペリは『人間の土地』の最初に「ほくら人間について、大地が万巻の書より多くを教える。その理由は、大地が人間に抵抗するがためだ。人間というのは障害物に対して戦う場合に、はじめて実力を発揮するものなのだ。」と言っている。子ども達が、何かを不思議がり、問いただし、冒険を好み、やりたがるのは、そうして抵抗物に立ち向かおうとしているのではないだろうか。目を輝かして。

長い夏休みを精一杯楽しむためにと、思うだけでもわくわくして暑さを忘れてしまう七月である。よい草にはうるおいを絶やさないようにしなければならぬし、子どもと一しよに汗だらけになる忙しい七月でもある。

(音羽幼稚園)